

人文会ニュース

1990. 2

人文書講座19

戦争と平和と20世紀……………猪口邦子 1

おんなの本から考える社会

……………松香堂書店 中西豊子 11

オブジェとしての書物から

社会的存在としての書物へ……………宮下志朗 19

ボストン大ブックストア見学記

……………豊田恭子 27

57

業務用

一九八九年度サントリー学芸賞受賞

ブリュッゲルの 『子供の遊戯』

遊びの
図像学

森 洋子著

* 7500円

税別

ブリュッゲルの名作「子供の遊戯」に描かれている91種類の遊びの社会的意味を解説、西欧子供観の通説を破る新しい子供学の誕生

未来社 〒112 東京都文京区小石川3-7-2
電話03(814)5521 振替・東京7-87385

三世代同居

幸福な
同居は
可能か

鈴木由美子・ナグエル・フワイ著

定価一四四二円

一軒の家に二人の主婦は不要だという。しかし、高齢化がすすむ中で、国や地方自治体は複世代の同居を積極的推進しようとしている。円満な同居のための鍵はあるのか。現状をドキュメントで追いつ、アンケートが内実を語る。

専業主婦が消える日

金森トシエ・北村節子著
定価一三三六円

シングル・カルチャー

青木やよひ著
定価一四四二円

母子癡着

木村 栄・馬場謙一著
定価一五四五円

(定価はすべて税込みです。)

有斐閣

東京・千代田・神保町
TEL 03-265-6811

身体の文化 人類学

身体変工
と食人

◎吉岡都夫著
定価1980円

経塚の諸相 とその展開

◎関 秀夫著
定価35000円

世界旧石器

時代概説

◎ワイマー著／河合信和訳
定価4800円

日本の城の 基礎知識

◎井上宗和著
定価5800円

雄山閣

*価格は税込みです。

千代田区富士見2／振替東京3-1685

吾妻鏡の方法

事実と神話
にみる中世

五味文彦著

四六判二六八頁／定価一五〇〇円

東国に生まれた初の武士政権の誕生と再生の歴史。鎌倉時代の最重要史料である「吾妻鏡」に、作品論と、丹念な記事分析を通じて迫る。いまここに鎌倉政権像が新たに再現される。

天平美術への招待

関根真隆著

A5判二三八頁／定価三九〇〇円

正倉院宝物考 正倉院の宝物調査に長年携わってきた著者が、個々の宝物を通して天平美術の世界へと導く。写真図版多数

吉川弘文館

〒113・東京都文京区本郷7-2-8／定価は税込

戦争と平和と二十世紀

猪口邦子

一九九〇年が幕開けた。激動の一九八九年を経て、二十世紀もいよいよ世紀末の局面に入りつつある。

二十世紀を一言で表現するならば、それは戦争と成長の世紀であったといえるかもしれない。十八世紀からの戦死者総数の九〇％は二十世紀に集中し、また二十世紀の戦争で亡くなった人の数は、古代から十九世紀末までの戦死者の総和を上回っている。第二次世界大戦後もすでに百をこえる武力紛争が発生し、国連統計によれば二千万人以上が犠牲となってきたが、それは第一次世界大戦での戦死をはるかに超える規模である。戦争の破壊力

が急増した二十世紀は、世界史のなかにおいて戦死の世紀として特徴づけられるほどの悲惨な顔を持っている。

他方で、成長もまた二十世紀の顔である。人間社会の科学的知識の九〇％は過去三十年の間に築かれたと言われ、二十世紀はかつてない規模の人口の生存を可能にする生産力を実現してきた。戦争は破壊を、成長は創造を本質とする人間の営為だが、二十世紀にはそのいずれもが空前の規模で展開し、文明社会の絶望と栄光を代表したのであった。

その戦争と成長の世紀の果てで、世界は冷戦の熱戦化Ⅱ

核戦争による文明破壊の脅威と、節度ない成長主義による環境破壊の脅威に向かい合うようになる。従って、今世紀末最大の課題は、戦争と成長の世紀の極限にある文明破壊と環境破壊の危険に対処することであろう。その意味で一九八九年は、二十世紀の超克に向けての最初の一步が記された年であり、世紀末的転換への節目であったと後世の研究者たちは見るかもしれない。一九八九年は偶然にも第一次大戦勃発五十年目、第二次大戦勃発五十年目に当たるが、その年に冷戦の象徴としてのベルリンの壁は解体され、年末のマルタ会談では米ソ首脳が冷戦を終結させていくことに合意した。また夏のアルシュ・サミットは、主要先進国首脳会議としては初めて地球的規模の環境破壊問題への対応を本格的に呼びかけた。戦争と成長の世紀をこえるためのパラダイム・シフトである。

* * *

戦争と成長⇨破壊と生産は対立的な概念のようでありながら、歴史の現実のなかでは相互連動的な現象であった。戦争とは多大なコストを要する活動であるため、生

産が未だ不確実な二十世紀はじめの頃までは、大規模な戦争は経済の繁栄期においてこそ起こり得たのである。繁栄期には軍備という非生産部門の支出の拡大が可能になり、人口の面でも余裕が発生して対立を武力で解くというコスト高の選択が現実のものとなりやすかった。また経済的余裕は、攻撃的で拡張志向的な強気の心理につながりやすいという見方もある。実に長い間、人間社会の歴史の基層はそのような共同体の根源的な原理にかなり規定されてきたと言えよう。

先史時代の武力紛争の傾向を知る術はないが、たとえば未開民族についての文化人類学の調査では、一般的傾向として寒冷地や熱帯の厳しい自然条件下の民族の方が、温暖な地帯の民族より戦闘的でないなど、戦争と生産余力との根源的な関係を思わせる結果が得られている。やはり生活の余力との関係からか、戦争の発生しやすい季節は歴史的に見ると自然の実りの豊かなときであり、中世ヨーロッパでは戦争の九割が四月から十一月の間に発生していた。また、近代初頭のヨーロッパ大戦とも言われる三十年戦争（一六一八―四八）は、インド航路の開拓や新大陸からの銀の大量流入によるヨーロッパ経済

の長期上昇局面としてのいわゆる「長い十六世紀」(I・ウォーラーステイン)の果ての現象である。そして産業革命以降については、コンドラチェフの長波理論により、景気の上昇局面の頂点付近で大戦争が発生するという関係がより明確に示されている。コンドラチェフの第一波の頂点では、三十年戦争以来、最大の戦争であったナポレオン戦争が発生し、第二波の頂点では米国史上最大の戦死者を記録した南北戦争があり、第三波の頂点では第一次世界大戦が発生したのであった。

二十世紀には生産水準と人口規模が全般的に著しく向上したためか、戦争と景気循環の関連はそれほど明確ではなくなり、いつでも大戦争への余力はあるようになったとも言えよう。しかし、長波をそのままつなげてみれば——コンドラチェフは次の波を検出するまでは生きなかった——、第四波の頂点では戦後最大の戦争であったベトナム戦争が発生している。またその後の最大の戦争は百万人の犠牲と数千億ドルの戦費をもって戦われたイラン・イラク戦争であったが、そのような破壊の規模はオイル・マネーで潤った地域ならはのものである。そして一九八〇年代の繁栄の象徴となった日本は、世界の

主要国のなかで今日唯一、大幅な防衛支出増を計上している国である。繁栄の果実が破壊のためではなく共同体の福利の拡充に活用されるという願いとは裏腹に、古来から人間社会の戦争現象を規定した生産余力と破壊力の連動性は、二十世紀末世界においても未だ克服されないままなのだろうか。

* * *

成長が戦争を可能にする一方で、戦争は成長を大局的には阻むことが多いと言えよう。軍需景気に関する通説や、軍備の研究開発投資が公共投資と同様の経済効果をもたらすという軍事的ケインズ主義の論議にもかかわらず、戦争関連支出が長期的には成長を脅かすことは、コンドラチェフのいずれの長波も大戦争をピークに下降局面へと転じていったことにも示されている。二十世紀においても、第一次世界大戦後約十年で世界経済は大恐慌へと雪崩込み、戦後最大のベトナム戦争に続く時期はやはり戦後最大の不況期であった。

そして、二十世紀のなかで最大の支出を伴ったある種の戦争としての冷戦の終結もまた、成長の行き詰まりを

ひとつの契機としている。ソ連が核戦力での米国とのパリティを追求する過程で国民経済に強い犠牲はあまりにも大きく、また米国の方も平時における米史上最大の軍拡予算を組んだレーガン政権下で最大の貿易赤字兼財政赤字国並びに最大の債務国へと転落したのであった。米国は冷戦に勝ったという。しかし、これほど勝者の経済的地位を揺るがした「戦争」も希有であろう。軍備が技術集約的かつ資本集約的になった今世紀、戦争および戦争準備の経済への負のインパクトも極大化したのであった。

緊張緩和への動きは一九七〇年代のはじめにも見られた。一九六九年から戦略兵器削減交渉（SALT）の第一ラウンドが開始し、七二年のSALT Iの調印などがデタントの象徴とされたが、この条約は配備済みの核兵器を撤廃させるものではなく、現状凍結ないし配備の上限を定めた軍備管理の条約であった。このデタントは一九七九年末のソ連のアフガニスタン侵攻で頓挫し、世界は新冷戦に突入した。

新冷戦から新デタントへの最初の兆しは一九八五年に現れる。一九八五年三月に西側との交渉に意欲的なゴル

バチョフ政権がソ連に誕生したことは、新デタントへの好条件となった。ゴルバチョフは就任と同時に、決裂していた中距離核戦力などに関するジュネーブでの軍縮交渉を再開し、またその年の十一月には、一九五九年のアイゼンハワー・フルシチョフ会談にはじまる戦後米ソ首脳会談史上最長の空白を破ってレーガン・ゴルバチョフ首脳会談がジュネーブで開催された。以降、米ソ首脳会談は昨年のマルタ会談を含めて毎年開催され、定例化への暗黙の合意が伺われるとも言えよう。

一九八七年には史上最初の核軍縮条約となったINF（中距離核）全廃条約がワシントンで調印され、翌年、レーガンのモスクワ答礼訪問での批准書交換とともに発効した。射程五百から五千五百キロメートルのINFは、ワシントン・モスクワ間は八千キロメートルであることから主として欧州正面での限定核戦争を想定して開発されたもので、条約は三年かけてこの範疇の地上発射ミサイル、発射基、支援施設などを配備分、未配備分をあわせて全廃することを定めている。INFが米ソの核戦力全体のなかで占める割合は一割にも満たない。しかしたとえば、レーガンが主力INFとして英国や西独に一九

八三年から配備したパーシングIIは最大速度マッハ一二で着弾まで八分しかかからず、半数の弾頭が分散する半径(CEP)は四五メートルと驚異的なまでの命中精度を持ったためソ連が最も恐れていた兵器と言われる。命中精度が高く、かつ射程距離に限界があれば、大陸間弾道弾(ICBM)など全面核戦争に一気につながり得る戦略核兵器と比べると、実際の作戦活動で最も使われやすい核兵器であったかもしれない。その兵器を欧州正面のみならず、アジア配備分も含めて廃棄するグローバル・ゼロに合意した成果は、核戦力の管理・軍縮体制を含む新デタントへの強力な推進要因となった。

パーシングIIの例からも推察されるように、新デタン

藤原武弘◎著

シネマ・サイコ

〈好評発売中〉

■映画心理学 社会心理学者が縦横に語る映画の魅力。映画鑑賞者の心理—とつわけ愛、恐怖、喜び、甘え、哀しみといった感情や情緒—面からの映画論。劇場の人間工学。さらには、映画刺激の次元や因子を探りつつ、映画の面白さの正体へと迫る。

四六判/定価一八五〇円

野村幸正著

知の体得

認知科学への提言

言語化によって切り捨てられた世界—技・身体性・直観・暗黙知・あいまいさ等—の分析から、人間の知の特質とその「体得」の過程をさぐり、「言語に拘束された」人間観を否定。そこから近代実証主義批判へと論を進め、学問の方法にも大胆な提言を与える著者会心の一作。

四六判/定価二二〇〇円

福村出版

定価は税込

東京・文京・小石川1-3/電話(03)813-3981

トの背後には経済の疲弊という要因に加えて、核戦力の性能の高度化という問題もあった。初期のICBMはCEP値が数キロメートルにも及ぶなど、実際に作戦活動に用いられる技術水準のものではなかったとも考えられるが、近年の著しい先端技術の向上によって、あるいはじめて核兵器の実戦使用の現実的可能性が開かれたとも言えよう。そこでレーガンは抑止の論理をこえて、完全な迎撃体制ⅡSDI(戦略防衛構想)を狙うが、それが技術的にも、財政的にも不可能なことが判明した段階でのただひとつ残された安全への確実な道は相手との政治的和解でしかない。ソ連にとっても同様であった。文明破壊の脅威が技術的に最も現実のものとなったのは成

長し技術革新の結果でもあり、新デタントは戦争と成長の世紀の果ての必然であったとも言えるのである。

いずれにしても新デタントは、グラランド（大）・デタントないしジェネラル（総合）・デタントへと発展していく様相である。核戦力については、上述のように軍備管理をこえて実質的な核軍縮の成果が見られるようになった。東西経済交流も急速に拡大し、西側諸国の東欧経済支援など経済デタントの現象も顕著である。さらにハンガリーとオーストリアなど小国間のミニ・デタントも進展し、ベルリンの壁の解体に象徴されるヨーロッパ地域としてのリージョナル・デタントも現実のものとなった。さらに、一九八八年のイラン・イラク戦争の休戦や一九八九年のソ連のアフガニスタンからの撤兵完了など、米ソ関係の好転を背景に、第三世界の地域紛争も相次いで鎮静化しつつある。

最も破壊的であった世紀の終わりにふさわしい世界史的大転換としての冷戦終焉への動きは、多方面にわたって進行中である。

* * *

この世紀末はまた、一千年期の終わりでもある。一千年前の世界はどのような対立の構図のなかにあったのだろうか。約一千年前、人間社会は信条という抽象理念のための大戦争し十字軍遠征を開始しようとしていた。ヨーロッパでは封建制の確立とともに教会が権力化し、他方十一世紀前半にはセルジューク・トルコが伸長してキリスト教世界の脅威となったのである。中世初期の農業改革の効果は教義のために遠方での大戦争を遂行する余裕をヨーロッパ社会にもたらし、十字軍遠征は中世最大の戦争となった。イデオロギーというある種の信条対立による冷戦は、十字軍遠征や、旧教・新教対立の三十年戦争など、信条の相剋を契機とする大破壊の系譜の末尾に位置し、冷戦の終結は、人間が教義のための大破壊を肯定した一千年期の終わりに符合するのかもしれない。

教義のための戦争は妥協なき破壊となりやすい。生産が著しく不安定であったころ、人間社会にとって教義のための大戦争は不可能であり、成長し技術革新が著しく進展した今日も、やはり人間社会にとって教義を政治化して全面戦争を行うことは不可能になりつつある。

さらに長い歴史的時間に照らして考えるならば、冷戦

の終結は、古くはアテネ・スパルタ間のペロポネソス戦争にも遡る大國間の戦争史そのものの終わりに位置するのもかもしれない。第二次大戦後、すでにすべての戦争は大國間以外のものとなり、大國間戦争の変形として残ったのが冷戦であった。破壊力が極大化した時代には大國同士の戦争は不可能となる。しかし、それは必ずしも大國の戦争がなくなることを意味するわけではなく、マルタ会談直後の米國のパナマ進軍のように、大國は勝敗が明白でエスカレーションの危険性のない戦いを気紛れに展開するのだろうか。

そのような戦争や小國同士の戦争現象は残るとしても、大國同士の戦争の終焉は、覇権の終焉を意味することにもなろう。大國間の戦争で世界史の基層が規定される時代には、軍事覇権の掌握を目指すところが大國の本質的な行動原理であったが、大戦争が不可能となった時代には軍事覇権の意義も次第に形骸化していくであろう。経済がグローバル化する時代には陣営という形のテリトリーを囲うことは絶大なコストの割にリターンの少ない戦略でしかない。大戦争を戦わない時代には、国力のなかに占める経済力の比重も一層高くなる。冷戦の終結は、

そのような歴史の変転を背景とした世紀末の選択であった。エーゲ海の覇を競ったベルシャ戦争や、地中海の覇をかけたポエニ戦争以来の軍事覇権の歴史の終わりに私たちは立ち会っているのかもしれない。

「戦争と平和と二十世紀」に関する本

★『戦争と平和』の理論書・概説書

猪口邦子『戦争と平和』東京大学出版会、一九八九年。

猪口孝『国際政治経済の構図』有斐閣新書、一九八二年。

ガストン・ブートゥール、ルネ・キャレル『戦争の社会学』

高柳先男訳、中央大学出版部、一九八〇年。

マイケル・ハワード『ヨーロッパ史と戦争』奥村房夫・奥村

大作訳、学陽書房、一九八一年。

ロジェ・カイヨワ『戦争論』秋枝茂夫訳、法政大学出版局、

一九七四年。

『世界の戦争（全一〇巻）』講談社、一九八五年。

A・J・トインビー『歴史の研究（全二五巻）』経済往来社、

一九六九—七二年。

筒井若水『戦争と法』東京大学出版会、一九七一年。

今村仁司『暴力のオントロギ』勁草書房、一九八二年。

K・E・ボールディング『紛争の一般理論』内田忠夫・衛藤

藩吉訳、ダイヤモンド社、一九七一年。

市田良彦他『戦争——思想・歴史・想像力』新曜社、一九八九年。

奥村房夫『戦争』の論理』学陽書房、一九八六年。

中野実『革命』東京大学出版会、一九八九年。

猪口孝『国家と社会』東京大学出版会、一九八八年。

★世界大戦に関する名著・基本書

ジュームズ・ジョル『第一次世界大戦の起源』池田清訳、みすず書房、一九八七年。

A・J・P・テイラー『第二次世界大戦の起源』吉田輝夫訳、中央公論社、一九七七年。

A・J・P・テイラー『戦争はなぜ起こるのか』古藤晃訳、新評論、一九八二年。

E・H・カー『両大戦間における国際関係史』衛藤藩吉・斉藤孝訳、弘文堂、一九五九年。

K・D・ブラッハー『ドイツの独裁——ナチズムの生成、構造、帰結（I・II）』山口定・高橋進訳、岩波書店、一九七五年。

山口定『ファシズム』有斐閣、一九七九年。

入江昭『二十世紀の戦争と平和』東京大学出版会、一九八六年。

野田宣雄『教養市民層からナチズムへ』名古屋大学出版会、一九八八年。

アドルフ・ヒトラー『わが闘争（上下）』平野一郎・将積茂

訳、角川文庫、一九七三年。

V・E・フランクル『夜と霧——ドイツ強制収容所の体験記録』霜山徳爾訳、みすず書房、一九六一年。

インゲ・ショル『白バラは散らず』内垣啓一訳、未来社、一九六四年。

中井晶夫『ヒトラー時代の抵抗運動』毎日新聞社、一九八二年。

山下公子『ミュンヘンの白いバラ——ヒトラーに抗した若者たち』筑摩書房、一九八八年。

ヴィクトリア・デ・グラツィア『柔らかなファシズム——イタリア・ファシズムと余暇の組織化』有斐閣、一九八九年。

ジョン・W・ダワー『人種偏見——太平洋戦争に見る日米摩擦の底流』斉藤元一訳、TBSブリタニカ、一九八七年。

クリストファー・ソーン『太平洋戦争とは何だったのか——一九四一—四五年の国家、社会、そして極東戦争』市川

洋一訳、草思社、一九八九年。

入江昭『日米戦争』中央公論社、一九七八年。

日本国際政治学会・太平洋戦争研究部『太平洋戦争への道（全八巻）』朝日新聞社、一九六二—六三年。

早乙女勝元『東京大空襲』岩波新書、一九七一年。

ハーバード・フェイス『原爆と第二次世界大戦の終結』佐藤栄一他訳、南窓社、一九七四年。

★戦後世界の戦争と対立

永井陽之助『冷戦の起源』中央公論社、一九七八年。

永井陽之助『現代と戦略』文芸春秋、一九八五年。

進藤栄一『現代紛争の構造』岩波書店、一九八七年。

リチャード・ニクソン『一九九九年…戦争なき勝利』読売新聞社外報部訳、読売新聞社、一九八九年。

日本平和学会編集委員会編『平和学——理論と課題』早稲田大学出版部、一九八三年。

明石康『国際連合（第二版）』岩波新書、一九七五年。

小此木政夫『朝鮮戦争——米国の介入過程』中央公論社、一九八六年。

グレアム・T・アリソン『決定の本質』宮里政玄訳、中央公論社、一九七七年。

D・ハルバスタム『ベトナムの泥沼から』泉鴻之・林雄一郎訳、みずす書房、一九八七年。

ベトナム戦争の記録編集委員会編『ベトナム戦争の記録』大月書店、一九八八年。

ジョージ・C・ヘリング『アメリカの最も長い戦争（上下）』秋山昌平訳、講談社、一九八五年。

アムスネティ・インターナショナル日本支部編『小さな島の大きな戦争——東チモール独立運動をめぐる大規模人権侵害』第三書館、一九八九年。

★戦争の思想・平和の思想

マキアヴェッリ『君主論』黒田正利訳、岩波文庫、一九三九年。

年。

クラウゼヴィッツ『戦争論（上中下）』篠田英雄訳、岩波文庫、一九六八年。

ピーター・パレット『クラウゼヴィッツ——「戦争論」の誕生』白須英子訳、中央公論社、一九八八年。

サミュエル・ハンチントン『軍人と国家』市川良一訳、原書房、一九七八年。

伊藤憲一『国家と戦略』中央公論社、一九八五年。

カント『永遠平和のために』宇都宮芳明訳、岩波文庫、一九八五年。

モンテスキュー『ローマ人盛衰原因論』田中治男・栗田伸子訳、岩波文庫、一九八九年。

トルストイ『戦争と平和（全四巻）』米川正夫訳、岩波文庫、一九八四年。

D・ゼングハース『軍事化の構造と平和』高柳先男他訳、中央大学出版部、一九八六年。

J・ガルトウング『平和への新思考』高柳先男・塩屋保訳、勁草書房、一九八九年。

日本平和学会編集委員会『平和の思想』早稲田大学出版部、一九八四年。

宮田光雄『平和の思想史的研究』創文社、一九七八年。

朝日新聞テーマ談話室編『日本人の戦争』平凡社、一九八八年。

横田正平『玉碎しなかった兵士の手記』草思社、一九八八年。

ベティ・リアドン『性差別主義と戦争システム』山下史訳、
勁草書房、一九八八年。

★戦争と平和論を含む国際関係論の概説

H・J・モーゲンソー『国際政治』現代平和研究会訳、福村
出版、一九八六年。

花井等『現代国際関係論（増補版）』ミネルヴァ書房、一九
八七年。

『講座国際政治（全五巻）』東京大学出版会、一九八九年。

★世界システム論・覇権論の視点

I・ウォーラーステイン『近代世界システム（ⅠⅡ）』川北
稔訳、岩波書店、一九八一年。

田中明彦『世界システム』東京大学出版会、一九八九年。

猪口邦子『ポスト覇権システムと日本の選択』筑摩書房、
一九八七年。

★現代の安全保障問題

ブルース・M・ラセット『安全保障のジレンマ』鴨武彦訳、
有斐閣、一九八四年。

ストックホルム国際平和研究所・東海大学平和国際研究所編
『SIPRI年鑑』東海大学出版会。

英国国際戦略研究所『ミリタリー・バランス』防衛庁防衛局
監訳、朝雲新聞社。

高榎堯『現代の核兵器』岩波新書、一九八二年。

前田寿『軍縮交渉史（上下）』東京大学出版会、一九六八年。
佐藤栄一『現代の軍備管理・軍縮』東海大学出版会、一九八
九年。

坂本義和『軍縮の政治学』岩波新書、一九八二年。

山田浩『核抑止戦略の歴史と理論』法律文化社、一九七九年。
豊田利幸『SDI批判』岩波新書、一九八八年。

坂井昭夫『軍拡経済の構図』有斐閣、一九八四年。

猪口邦子（いのぐち・くにこ）

一九五二年千葉県生まれ。米国の高校を卒業の後、上智
大学に学ぶ。エル大学大学院より政治学博士号（Ph・
D）を取得し、現在、上智大学法学部助教授。著書に
『ポスト覇権システムと日本の選択』（筑摩書房）、『戦争
と平和』（東京大学出版会）があり、『戦争と平和』は一
九八九年吉野作造賞を受賞した。

おんなの本から考える社会

ウイメンズブックストア
松香堂書店代表取締役

中西 豊子

ウイメンズブックストアのとりくみ

昨秋、「いま、おんなの本が面白い！」というタイトルで、ブックフェアを催した。会場は、京都洛北の国立京都国際会館。京都府が主催した「あけぼのフェスティバル89」の中でのサブ行事の一つとしてアレンジしたものである。このフェスティバルは、女性政策推進のための「あけぼのプラン」が出されたのに因んで開催され、二日間で一万人の入場者を数えた。石井ふく子、樋口恵子、上野千鶴子氏らの講演やシンポなど、終日多彩なプ

ログラムで、女性の人気を集めた。

ブックフェアのコーナーでは、殆どの入場者が足をとめ、本を手にとる人々で賑わった。東販の協力を得て、並べられた本は六百点余。行政の主催するイベントの中で、こんな形でブックフェアが持てたのも画期的なことだった。私が女性の本屋を開店した八年前に比べて隔世の感がある。

一九八二年の一月、ウイメンズブックストアを始めるに当って、女性問題の本を選び出した。当時既に女性史、自伝、家族論、女性論やからだの本等、かなり出版され



「いま、女の本がおもしろい」ブックフェア会場

ていたにもかかわらず、一般に「女性問題」「女性学」などの言葉は殆ど認知されていないで、版元でさえ、尋ねてもはかばかしい答えが得られない状況であった。ここ数年の間に、男女雇用機会均等法の施行や女性学の急速な普及などもあって、女性問題への関心が急になった。従って多種多様な本が立て続けに出るようになったのは嬉しいことだ。ほんとに「今おんなの本が面白い!」のだ。

私の店では、本を売るだけでなく、女性の本と女性の情報をお知らせする情報誌『ウイメンズブックス』を、開店以来、季刊ながらどうにか出し続けている。この情報誌を出すために、一応全部の本に目を通す。そして新刊情報や特集のテーマに沿った本の解説を書く。——余談ながら、この仕事を担当してくれて八年、現在本の紹介や評論のプロとして、新聞雑誌で大活躍している木下明美さんが、今も一冊一冊読んで解説を書いている——。だから女性の本の情報を収集するのも大切な仕事だ。女性グループの動静も情報として伝える必要があるのだ、ネットワーク作りにも力を注いでいる。全国から本や女性の情報の問合せも多い。一書店としては手にあまる仕

事を抱えているのだが、女ばかりのスタッフのこと、
「女の情報最前線」なんだからと取りくみは真剣だ。

最近の女性の本について

女性問題の本を扱う中から、『女たちが変えるアメリカ』（ホーン川嶋瑤子、岩波新書）と同じように、日本でも女たちが変わり始め、それにつれて世の中が少しづつ変わって行く様子が読みとれてくる。

一番顕著なのが家族問題である。家族やパートナシップについては、実に沢山の本が出版されてきたし、今も続々と出ている。実は二年前にウイメンズブックス誌でパートナシップについて特集を組んだ。その時、私たちも驚いたほどに、たくさんさんの離婚についての本が出版されていた。『離婚の本』（渥美雅子監修、婦人画報社）『離婚を考えたら読む本——不安・心配ごとのすべてが解消する』（円より子、エスカルゴ・ブックス）『50人の隣の女たちから——離婚しっかり本』（グループくるくるY編、冬樹社）といった離婚のための具体的な参考書から、『離婚!?——する幸せ・できない不幸せ』（有地享、有斐閣）『離婚の社会学』（野々山久也、日本評論社）

『世代別に見る離婚——危機とその克服』（佐藤悦子、オール出版）のような研究者による分析の本、また『サヨウナラあなた——現代の離婚』（山下勝利、朝日新聞社）『離婚後の妻たち』（毎日新聞大阪本社社会部、朱鷺書房）『子どもが書いた離婚の本』（エリック・ローフス、コンパニオン出版）『破局——現代の離婚』（斎藤茂男、晩聲社）など最多数だったドキュメントやリポート等々は、では『家庭内離婚』（林郁、ちくま文庫）まで、離婚と名のつく本の何と多かったことか！ とてもここには紹介しきれない。一九八七年をピークに離婚の本ラッシュだった。その前の数年間、『危機の家庭』（吉武輝子、未来社）『夫たちの憂うつ』（斎藤茂男、日本放送出版協会）『家族 何が病んでいるのか』（朝日新聞学芸部、朝日新聞社）『家庭のない家族の時代』（小此木啓吾、集英社文庫）、といった本が盛んに出ていたわけだから、そのあとに離婚がくるのは当然のなりゆきだったのかもしれない。

そして、昨年あたりから、家族論は既成の結婚観、家族観に捉われない新しい展望を持ったものが増えてくる。『可能性としての家族』（小浜逸郎、大和書房）『結婚よ

りもいい関係——非婚の家族論』（坂元良江、人文書院）『夫婦別姓時代』（星野澄子、青木書店）『ポスト・ファミリー——その他の関係』（桜井陽子、汐文社）などが代表格だろうか。

以上の様な経過の中で、男も仕事一筋の働き蜂を返上して、家庭での役割をしっかりと受けもとうとする動きが出てきた。『男も変わり目』（藤原房子、日本経済新聞社）『男と女で「半分こ」イズム——主夫でもなく、主婦でもなく』（男も女も育児時間を！連絡会編、学陽書房）『ぼくらはハウスハズバンド——男が家事をする理由』（W・R・ピア、平凡社）などが一九八九年に入って次々と出版されている。

今では「女性問題」は「男性問題」と言い替えるべきだとさえ言われている。実際これまで女性の問題だと思われてきたことも、つきつめれば男性にいき当たる。先に見てきたように、家族や家庭も、男は仕事のみ、女は家庭のみという性別による役割分担を守ってきた家庭が崩壊の浮き目にあい、いきつく最後の夫の姿が「ぬれ落ち葉族」となるのでは、ここは一つ男性も考えねばならなくなるところだろう。

というわけで男性問題を考える本も相次いで出されるようになってきた。一九八四年にいち早く出たのが、『女の自立・男の自由』（菅孝行、毎日新聞社）だ。『シングルのライフ』（海老坂武、中央公論社）『脱男性の時代——アンドロジナスをめざす文明学』（渡辺恒夫、勁草書房）『怪傑！ハウスハズバンド』（村瀬春樹、晶文社）などは、男性によって書かれて話題をよんだ。「思想の科学」（No.57）、でも、「男らしさのゆくえ」を特集して、これまでの「男らしさ」にメスを入れている。スウェーデンは最も男女平等の進んだ国だといわれている。そのスウェーデンで男がどう変わったか知るのには、男女平等発展途上国の日本にはとても参考になる。『男が変わる——スウェーデン男女平等の現実』（ヤンソン由実子、有斐閣）がよいテキストとなろう。

女性と最近の話題

昨年の話題は何といっても参院選での女性の活躍だ。「マドンナ旋風」などと言われ、女性があたかもムードだけで当選してしまったかのようにコメントしている人が多かったが、女性の社会進出と決して無縁ではない。

一九八八年には女性の労働力は、一六七〇万人にも達している、その前の年に比べても五十五万人も増えている。賃金面などで、まだまだ男性との格差があるけれど、今では、管理職の女性も輩出してきたし、この数年、女性の意識は急速に変化してきている。人口の半分をしめる女性が変われば、当然、政治にも影響を与えるはずだ。

「89日本新語・流行語大賞」で新語・金賞を獲得した「セクシャルハラスメント」は、今年に入って急にマスコミにとり上げられるようになった。これは、二十余年前に米国のフェミニズム運動の中から生まれてきた語で、主に職場において女性であるが故に加えられる性的ないやがらせやおびやかしのことを言う。日本でも酔っぱらい男性に執拗にからまれた女性が、相手をふり払ったら、不運にも男性が線路に落ち、電車にはさまれて死亡した西船橋駅転落死事件、山形交通のバスガイドに対する性暴力事件等をきっかけに、女たちの間から、もう泣き寝入りはしないという声があがってきた。いつも暴力を受けたり、おびやかされたりしている側にもかかわらず、女性の方に非があるのではないかと言われてきた不思議。女たちの怒りの声は、遅きに失するのかもしれない。

ない。「セクシュアルハラスメント——女たちの告発」(宮渕子、教育史料出版会)『スクランブル講座—セクシャルハラスメント!』(女と男の21世紀を考える会編、JICC出版局)などがいち早く出版されている。「バカめ、その前に自分の顔を見よ」(週刊ポスト十一月十日号)などというような余りにお粗末な反応には、なさけなくなってしまう。

東京と埼玉で起きた連続幼女誘拐殺人事件や東京の女子高生監禁事件をはじめ、性暴力の犠牲になった女性の事件が目立ったことも忘れられない。こうした事件が、女性の人格を辱め、暴力をふるい、最終的には殺してもよいというメッセージを送り出しているポルノの延長線上で起ったことなのだ。ポルノが氾濫しているこの社会は、自分さえ楽しければ、人が辱められていようが、人権を侵害していようがおかまいなしという社会なのだ。女性が見れば不快感を催さずにはいられない女性蔑視のコマーシャルに対しても、女たちはNONを言いはじめた。「チビクロサンボ」絶版の話題と共に、表現の自由と差別の問題について、あちこちで論議が巻き起った。だが、人権を疎外するものは、表現の自由以前の問題だ

ということとは、まだまだ理解されないようだ。表現の自由が守られねばならないことは当然のことである。が、いわれない蔑視や差別的な表現が、表現の自由の名のもとに横行することは、やはり文化の質が低いといわれても仕方あるまい。今、私たち書店人、出版人が真剣に考えていかねばならない時期にきているのではないだろうか。

間違いだらけの性情報と女性のからだ

たいていの男性が、性に関する情報や、女性のからだについての知識を、ポルノビデオや、男性向け雑誌から得て成人になるといわれている。今ではコミックで覚えたという少年も多いようだ。ポルノやこうした無責任な雑誌等では、女性は常に犯される性であり、征服される性である。そして女性は犯されるのを待っているのだとさえ表現されている。そこでは、女と男のいい関係、ほんとうにコミュニケーションできる性はなく、貧困なイメージによって貧困な行為が繰り返されている。

男性ばかりではなく、女性までもが男性を通した性の情報を受け入れてしまって、困惑したり、悩んだりして

いる場合も多いことが女性の健康運動の中から解ってきた。女性自身が、自分のからだについての正確な知識がないことによって、あの富士見産婦人科事件（千人を超える女性たちに不必要な子宮摘出を行ったことが発覚した事件）をひき起こしたことは、女性たちに大きな衝撃を与えた。この事件のあと、女性自身が正しい知識と情報を持つと、『どうする子宮筋腫』（女のからだと医療を考える会、オリジン出版センター）『中絶——女たちからのメッセージ』（女のためのクリニック準備会編、出版）『沈黙をやぶった女たち』（女の人権と性）シンポジウム有志編、ミネルヴァ書房）などが出版された。

私たち日本女性学研究会のメンバーを中心に五十人の女性が力を合せ、『からだ・私たち自身』（ボストン女の健康の本集団著、藤枝濤子監修、河野美代子・荻野美穂校閲、松香堂）を、三年の歳月をかけて出版にこぎつけた。女性のからだの全てに亘って女性自身が語り、調査し、情報を結集したものである。原著は、ボストンの『女と健康運動』の中から生まれたもので、百人の女性の手で書き上げられた部厚な本。日本の女性たち、いや男性たちにも、女性のからだに関すること、性の知識を

きっちりと正確に知って貰うため、図版を多くし、あえてお産の写真も載せた。また日本の情報を加筆したので、そのために八十ものグループに協力を願っている。産婦人科のアンケート調査も、中絶の費用なども含めて、一覧表にして掲載した。中絶費用がこんな形で公表されたのは恐らく始めてだろう。女たちの本当に欲しい情報だ。「この本のおかげで卵巣嚢腫^{のうしゅ}を早期に見、命拾いをしました」という人からのお手紙を頂いたのは発刊後間もなくのこと。私たち編集に当たった者たちにとって大きな喜びだった。

からだに関する誤った考え方や知識ほど恐ろしいものはない。私たちは、間違いだらけの性の情報に対して、そのことを指摘していくだけでなく、正確な情報を送り出し、キャンペーンをする必要を痛感している。

高齢化社会と女性

『からだ・私たち自身』の中でも、「女と老化」という項目を設けているが、現在女性の平均寿命が八十歳を超えている日本では、女性にとって高齢の問題はいつも身近かだ。舅姑、両親、夫を看とり、そして一人で過す

期間も長くなった女性。介護は九十%以上が女性の手にゆだねられている。九十歳の姑を七十歳の嫁が介護しているというのが珍らしくないという状況が既に起きている。

『あなたの「老い」を誰がみる』（大熊一夫、朝日新聞社）『老いを看とる——人生八十年代の老年学』（沖藤典子、創元社）『老親ケア——親の面倒をみるときの参考書』（日経ホーム出版社）等、リポートや参考書も数多く出されている。「老い」に直面してからでは遅い。まだ若いと思っている間から、老いに対する考え方や、準備も始めておきたい。『夫と妻の老い支度』（重兼芳子、海竜社）『女は三度老いを生きる』（高原須美子、海竜社）『私の老い構え——元気に老いる女の16章』（樋口恵子、文化出版局）などはおすすりめできる。今年に入って「死に方」を考える本も増えてきた。『いのちを見つめて生きる』（黒田輝政編、ミネルヴァ書房）『家で死ぬ——柳原病院における在宅老人看護の一〇年』（大沼和加子・佐藤陽子、勁草書房）などだ。

また「老い」は何も女ばかりの問題ではないと、『いま問う、男の老い』（法学セミナー増刊33号、日本評論社）が昨年九月に発刊された。介護や老いの負の部分を

すべて女性に担わしておくことは、できない時代になってゆく。男性も「老い」の問題から逃げないで、正面からとりくんでほしいと思う。

いづれにせよ、誰もが迎える高齢期を、マイナスの面ばかりで捉えることはしたくない。人生の終りを、よりよい形で、過ごせる方策を、ソフトもハードも両面から考えていく必要がある。『人生は六十過ぎが面白い』（石垣綾子、海竜社）『すこやかに老いる』（一番ヶ瀬康子、ドメス出版）『シルバー・コミュニティ論』（原田正二、ミネルヴァ書房）等、参考になる本も多い。

以上、本を通して、いろんな問題をみてきたが、二十一世紀に向けて、女性の活動の場は、ますます広がり、女性の力が社会の前面に躍りでてくることになるのだろう。その上で、女と男の本当のいい関係が生れる社会を、私は願ってやまない。



オブジェとしての書物から 社会的存在としての書物へ

宮下 志朗

人々は本を読まなくなったという声をよく聞く。また一方で巷には本があふれているとも言われる。この二つの事柄は一見両立しないように思われる。ところがこのパラドックスにはそれなりの信憑性がある。人々は従来のイメージの本は読まなくなっても、完全に活字離れしたわけではない。大体からして新聞・雑誌のたぐいはたくさん読んでいるし、面白い本ならこぞって買う。

では出版点数が増加しているのかというと、確かにそうらしい。たとえば雑誌のことを考えてみても、それぞれ極端にターデットを絞りこんで編集されたものが多数

出されている。そして書物に関しても、雑誌化とでもいうべき現象が進行しつつある。今や出版業界は多品種を少しずつ刊行する時代、コンビニエンス・ストアー形式の時代に直面しているのである。

おかげで書き手の数ときたら、それこそ一昔前の比ではない。われわれが高校生くらいの頃など、本を出しているとか、フランス文学のちょっとした翻訳をしたとかいうだけで、大変な人だと思っていた。ところが今では大学教師（かくいう私もその一人だが）と同じで、石を投げれば著者に当たるといいう状況。なにやらブルーム

『アメリカン・マインドの終焉』の話にでもなりそうだが、そうではない。出版の形態も内容もずいぶん変わってきているという、当たり前事実を指摘しているのだ。ことはフランスでも似たようなものらしく、「書くことがわれらの時代のエートスであり、読むことではない」と歴史家ビエール・ノラは断言している。ただしフランスでは原稿を持ち込んでも、活字になるのはごく一部だ。脱線ついでに面白い数字を紹介しよう。人文科学書で定評あるファイヤール書店に一九八六年に持ち込まれた二〇〇〇余りの原稿のうち、本になったのはたったの一五〇点という。また同じく人文書や文学を手がけGFという文庫もだしているフラマリオン書店の場合、三七〇〇点のうち刊行されたのは二二〇点というのである。かなり狭き門である。

ところで受容の仕方ひとつをとっても、昔と今とは随分ちがう。昔ならばその本を買うか、借りるかして読むのがふつうだった。おとき話なんかなら、お婆さんやお母さんに聴かせてもらうことだってあっただろう。ところが今では映画やテレビのおかげで原作が売れる時代だ。それにおとき話をそらで覚えている母親などいなく

ても、有名な役者がカセットに吹き込んでいくるから、子供の就眠儀式としてカセットのスイッチを入れればよい。世の子供はみんな、母の子守歌代わりに俳優X氏の日本昔話を聴きながら寝いているのかも知れない。新聞社・テレビ局・デパートといった大資本が異業種から参入してきたのも、こうしたいわゆる「書物」の概念自体の変容を背景としている。とにかく出版物の数はやたらとふえている。毎日一〇〇点以上の新刊が発売されているという。そしてこうした本の洪水に呑み込まれて苦戦を強いられているのが、固い本の出版社ということになる。人文関係の良書を出している出版社の編集者が、とにかく点数を揃えなければいけないから、以前に比べて仕事がきつくなった、ノルマを達成するのは大変ですと話していた。

本を読む層にしたって、よく考えてよれば、かなり変わってきた。子供・老人・農民、これらはかつては読書の世界では周縁に位置する集団とみなされていた。しかしながら識字教育の徹底化や情報の均一化によって、彼らは今日ではむしろ有望な読者層として狙われる存在である。とりわけ児童書は巨大なマーケットを形成してい

るように見える。

そしてなんといつても女性読者の果たす役割が大きい。彼女たちこそは少なくともヨーロッパでは一九世紀以来小説の第一のお得意さまだった。たとえば修道会の経営する寄宿学校に入れられたエンマにとっては、通いの老嬢がしてくれる物語が、そして彼女が町からそつと借りてきてくれる小説だけが、自分のロマンチックな夢の源泉なのだった。

老嬢は前世紀の恋歌をそらで覚えていて、針を運びながら小声でそれを歌った。いろいろな物語を話してもくれたし、噂話を教えてもくれたし、町へ使い走りもしてくれたし、前掛けのポケットにいつもなにか小説を忍ばせていて、それを上級の生徒に、こっそり貸してくれたりもしたが、また彼女自身が仕事の合間に、その小説の長い章を夢中になって読みふけるのだった。そこに出てくるのは恋愛、恋する男たち、恋する女たち、淋しい離れ家で責めさいなまれて気を失う貴婦人たち、宿駅につけばかならず殺される馬車の馭者たち、頁ごとに乗りつぶされる馬、暗い森、心のざわめき、

誓い、すすり泣き、涙と接吻、月下の小舟、茂みのなかの夜鶯、獅子のように勇敢で、小羊のように優しく、及ぶ者としてないほど美德に溢れ、いつも身装を整え、そして泣くときはさめざめと涙を流す殿方たちであった。十五歳のとき、半年間、エンマはこうして古ぼけた貸本屋のそういう埃で手を汚した。その後はウォルター・スコットを読んで（・・・）長い胸衣を身につけた女城主、スベード型のアーチの下で、石に肘を突き掌に顎を埋めながら、向こうの野原の奥から白い羽根飾りを着けて黒い馬で疾駆する騎士がやってくるのを眺めようとして、日々を過ごしている女城主のように、どこかの古い館に住みたいものと思っていた。

（フロベール『ボヴァリー夫人』菅野昭正訳）

いささか引用が長くなってしまったが、現在ならばこうした乙女の夢見る思いは何が引き受けているのだろうか？ それはたぶん少女漫画ではないのか？ いやひょっとしたらハーレクイン・ロマンスかも知れない。また映画のこともあるし、ステージでプリンセスのような衣装で歌うアイドル歌手のことだって多いはずだ。要するに

夢想の運び手としてのメディアは、実に多種多様なものになっているのだ。

また印刷技術そのものも急速に変容している。活字を使ったいわゆる「凸版印刷」は電算写植による「オフセット印刷」（これは平板）にその座を明け渡しつつある。昔気質の植字工の姿がめっきり少なくなったという話も届いてくる。CDが溝の刻まれたレコードに取って変わったのも、似たような現象と言えなくもない。

*

結局、語の本来の意味での「活字文化」は、今や死に瀕しているのである。こうした状況は洋の東西を問わない。グーテンベルク以来約五百年で、「活字」というものが消え去ろうとしている。こうした事態が、ヨーロッパではなにやら懐旧の念をかき立てているようだ。広く「書物の社会史」と称される分野の研究が近年盛んなのも、このノスタルジーと、歴史をしっかりと記録にとどめるという信念とが結びついたものといえよう。

私の専門とするフランスでは、こうした出版文化の変容の時期に、写本時代から二〇世紀後半までを射程に収

めた総決算としての『フランス出版史』が刊行された（一九八三〜八六）。まさに時宜を得た企画として、話題をさらった。またイタリアでは、トリノーのエイナウディ書店から刊行された『イタリア文学』全九巻の、斬新な構成が衝撃を与えた。第一巻が「文学者と制度」、そして第二巻が「生産と消費」と題されて社会的生産物としての書物・作品が論じられ、第三巻でようやくにして「テキストの形態」が論じられる。いずれも千ページをこえる大冊で、この試みは画期的なものだろう。文学史といえ、せいぜいジャンル別といったところが現状なのだから。

書物や出版に関する著作もこうした転形期を確実に反映している。以前なら書物の本といえ、大体は愛書趣味的なものとの相場は決まっていた。ところが最近では、書物という生産物がいかに個人ないし社会で用いられてきたのかをめぐる研究がさかに行われている。フランスでは、「海賊版」をめぐるなどという面白いシンポジウムまで開かれている。

もっとも「書物の社会史」といっても、そのアプローチの仕方はさまざまである。まず最初に商品としての書

物の生産を把握する必要がある。各都市あるいは出版元ごとの書誌を作成するという地道な作業だ。そこから出発して、たとえばどのジャンル別の調査とか、検閲の問題とか、出版・流通のさまざまな側面に学問のメスが入れられる。最近のものとしてはグリヴェル女史の『一七世紀パリにおける版画の売買』（一九八六）という大変な労作が存在するが、これなどはわが国における浮世絵の版元研究と通底している。ただし私の感じでは、どうも江戸時代研究のほうが資料もバラエティに富んでいて面白そうだ。

いずれにせよ「書物の社会史」の本来本元のフランスでは、あくまでも実証主義、そしてアナール派の常数である統計主義が墨守されてきた。したがってアイゼンステイン女史の『変化要因としての印刷機』という大著（ダイジュエスト版の邦訳あり）などは、第一次資料によらぬ観念的な議論というレッテルを貼られかねない。マクルーハン『グーテンベルクの銀河系』の場合もそうだったらしいが、フランスではアングロ・サクソン系の研究に対しては評価が厳しいようだ。

むろんアングロ・サクソン勢でも多いに気をはいてい

る学者だっている。一六世紀リヨンの書物の世界で働く人々に鋭い視点から迫ったナタリー・デーヴィスもその一人である。彼女は「大食らい団」という世俗結社に拠るリヨンの印刷工が、宗教と経済とは別物だと割り切っていたことを明らかにし、注目を集めた。

次にいわゆる受容の研究も活況を呈している。たとえばラバールは北フランスの都市アミアンの遺産目録を徹底的に調査して、一六世紀の都市住民がどのような書物を所有していたのかを教えてくれた。それを読むと、書物を遺産として残したアミアン商人が二六一人いて、その半数近い一三人は本を一冊しか所有してなかったことまで分かる。ではそのステイタス・シンボルとしての一冊とは何であつたのだろうか？　ほとんどの商人にとつてそれは時禱書なのだった。同時代の絵画で豪華な時禱書がしばしば虚栄の象徴として描かれていることが連想される。そういえば一昔前の日本、つまり戦後の復興期の日本では、百科事典とか文学全集が庶民の家庭で「知の家具」として置かれていたことまでも思い出される。

ところでこの受容の研究でもっとも有名なのが、「青表紙本」にかんする論争であろう。この「青表紙本」と

は一七世紀から一九世紀にかけて手広く流通した薄手の低価格本で、表紙がかすかに青みがかっていることからこう呼ばれている。シャンパーニュ地方のトロワで生まれたこのジャンルは、果たして行商によって津々浦々まで売りさばかれた民衆本なのか、それとも逆に都市の書店で中産階級向けに売られたものなのか決着はついていない。また「青表紙本」は民衆の想像力を解放するのに貢献したのだろうか、いやとんでもない、民衆に対する鎮静剤としての使命を帯びて出現したのだなどと議論は尽きないが、わが国でも長谷川輝夫氏がこの錯綜した論争に貴重な一石を投じている。

*

「書物の社会史」なるものは、このようにメディアとしての印刷物の役割を十分認識することから始まる。「ボヴァリー夫人」の一節をもう一度読んでみよう。凡庸な結婚に幻滅したエンマ・ボヴァリーが、貸本屋の小説のなかに夢をみることできた頃をなつかしむ描写は、彼女の不倫への伏線となっているのである。こうして「貸本屋（キャピネ・ド・レクチュール）」というシステ

ムが作品で重要な役割を果たしている事実にもっと注目をすべきであろう。ボヴァリスム（ロマンチックな夢想を抱く傾向があるため、現実・日常性に対して満足できないこと）の媒介者を、なんと貸本屋が果たしているのだ。一九世紀の小説には「貸本屋」がしばしば点景として用いられているが、実際、この世紀のフランスでは「貸本屋」は非常にはやっていたのである。

ところがこのような一見どうでもいいような細部から書物の世界を眺める試みは、文学の側からも歴史の側からもまだあまりなされていない。「神々は細部に宿れり」、そろそろ乱歩の「押絵と旅する男」みたいに、遠眼鏡で覗いた世界に入り込む者がいてもよいのではないか。そうすることで思いもかけぬパノラマが開けるにちがいない。

「書物の社会史」は学問として認知されたものの、その枠を打ち破るまでにはなっていない。一般の読書人にも開かれた「書物の社会史」、それが求められているのではないだろうか。

『書物の社会史』と親しむために(筆者の能力からして主にヨーロッパを対象とした文献を、単行本にかぎって挙げた)

フエーヴル・マルタン『書物の出現』上・下(筑摩書房)

ナタリー・デーヴィス『愚者の王国 異端の都市』(平凡社)

ロバート・ダーントン『猫の大虐殺』(岩波書店)

宮下志朗『本の都市リヨン』(晶文社)

『アナル論文選4 都市空間の解剖』(新評論)

*ロジェ・シャルチエ編『読書のプラチック』『印刷物の用法』/ロジェ・シャルチエ著『アンシャン・レジーム期のフランスにおける読書と読者』——シャルチエはマルタンと共に『フランス出版史』の編者。社会科学高等研究院で挑発的なセミナーを組織している。これらは翻訳計画もあるらしいが今のところ未刊。

ロルフ・エンゲルジング『文盲と読書の社会史』(思索社)

エリザベス・アイゼンステイン『印刷革命』(みすず書房)

マーシャル・マクルーハン『グーテンベルクの銀河系』(みすず書房)

ジェームス・トムプソン『出版産業の起源と発達』(出版同人)

リチャード・ホガート『読み書き能力の効用』(晶文社)

カロール・チボラ『読み書きの社会史』(御茶の水書房)

ウィリアム・アイヴィンズ『ヴィジュアル・コミュニケーションの歴史』(晶文社)

ホグベン『洞窟絵画から連載漫画へ』(岩波文庫)

ヘルムート・プレッサー『書物の本』(法政大学出版局)

『小野二郎著作集2 書物の宇宙』(晶文社)

香内三郎『活字文化の誕生』(晶文社)

山田昭廣『本とシェークスピア時代』(東京大学出版会)

水田洋『知の商人』(筑摩書房)

今田洋三『江戸の本屋さん——近世文化史の側面』(NHKブックス)

前田愛『近代読者の成立』(有精堂)

『前田愛著作集2 近代読者の成立』(筑摩書房)

加藤秀俊・前田愛『明治メディア考』(中央文庫)

◆書物と民衆文化

ロベール・マンドルー『民衆本の世界』(人文書院)

カロール・ギンズブルグ『チーズと蛆虫』(みすず書房)

ピーター・バーク『ヨーロッパの民衆文化』(人文書院)

小野二郎『紅茶を受皿で』(晶文社)

小林章夫『チャップ・ブック——近代イギリスの大衆文化』(駁々堂)

阿部謹也『歴史と叙述』(人文書院)

松村喜雄『怪盗対名探偵』(晶文社)

『ドイツ民衆本の世界』全6巻(国書刊行会)

◆その他

エリック・ド・グロリエ『書物の歴史』(文庫クセジュ)

ミシエル・ヴォケール『愛書趣味』（文庫クセジュ）

エズデイル『西洋の書物』（雄松堂）

寿岳文章『図説 本の歴史』（日本エディタースクール出版部）

寿岳文章『書物とともに』（富山房百科文庫）

河野興一『学問の曲がり角』（岩波書店）

大輪盛登『グーテンベルクの類』（筑摩書房）

荒俣宏『絵のある本の歴史』（平凡社）

鹿島茂『レ・ミゼラブル百六景——木版挿絵で読む名作の背景』（文藝春秋）

宮下志朗（みやした・しろう）

一九四七年長野県生まれ。東京大学大学院修士卒。フランス・ルネサンス文学専攻。現在、中央大学助教授。

著書に『本の都市リヨン』（晶文社）、『フランスの文学』（有斐閣、共著）。共訳書にマドレーヌ・ラザール『ラブレーとルネサンス』（白水社）、フェーヴル・マルタン『書物の出現』（筑摩書房）、ナタリー・デーヴィス『愚者の王国 異端の都市』、『大航海時代叢書Ⅱ・20』（岩波書店）ほかがある。



ボストン大ブックスストア見学記

—石油会社の看板を掲げるショッピング・モール

豊田 恭子

ボストン大(BU)ブックストアは、東西にやたらと長いBUキャンパスの東の端——別の見方をすれば、地下鉄とバスのターミナルが集中する市街地の中心地に位置している。

地下一階地上六階の古びた建物は二〇世紀初頭の建築物、屋上には石油会社CITGOが四十年前に掲げたとかいう大看板。ただでさえ看板の少ないボストンの街で、この(センスも面白味もない)赤い三角形はやたらと目立つのだが、一九八三年、BUがこの建物を買取り、キャ

ンパス・ショップとしてオープンさせる際に取り外そうとしたところ、長年この看板をこよなく愛してきた地元住民の大反対運動に会い、そのまま残したという。(ボストンとは、こういう街なのだ。)

正式名称はBUブックストア・モールというが、中身はBUショッピング・モールと呼んだ方がびっぴりくる。いや、学生より一般の顧客の方が多い店内をみると“BU”の冠もとった方がいいかもしれない。

地下一階文具・生活用品、一階洋品(BUのネーム入

りTシャツやトレーナーが並ぶ)、三階は旅行代理店、DPE、コンピュータ・ショップが入り、四階教科書・ディスカウント本、五階専門書、六階が倉庫とオフィスである。地元のチャールスバンク・ブックショップが経営するのは二階の一般書と四階、五階の三フロア。二階の雑誌・コミックコーナーは、また別のマガジンショップ経営になる。三フロア合わせて約三百坪、ニューヨークグラランド(アメリカ東海岸北部)一の売場面積を誇る。もっとも、買切をベースに経営されるこちらの書店は一般に規模が小さい。人口六〇万人、大小合わせて三〇を越える大学を有するボストンでさえ、百坪以上の書店を数えるのに片手ですむ。

徹底した分業体制とコンピュータ

仕入部は六人。マネジャーのフランクを筆頭に、ニコル、メアリ、アンドレ、ダイアン、ダン。これにアルバイトが常時二〜三人。ニコルがペーパーバックなど、マス・マーケット本を、メアリが児童書を、そしてフランクがその他全ての一般書から専門書までを担当するといふ、どう考えても不均等な役割分担が行われている(教

科書はまた別の仕入部で管理する)。

出版社から新刊案内が届くと、この三人がカタログの上にマジックで注文部数を書き入れている、それがアンドレの机の上に集まり、彼が注文伝票をおこすと、ダイアンにまわって、そこで社内コンピュータに入力される。BUブックストアはボストン公共図書館にも一部署籍を卸していたから、その管理をダンがする。

検品は倉庫で別の人間が行ない、売り場で棚に入れるのも、また別の人間である。仕入部のメンバーが売り場に立つことはなく、売り場のスタッフが注文に関与すること、倉庫係が売れ筋を気にすることもない。

個々人をつなぐのは、唯一、コンピュータである。仕入部メンバーは全員、机上にターミナルをもつし、倉庫にも売り場にもターミナルは散在する。売り場で顧客から質問がくれば、すぐさまキーボードをたたき、それは注文中だとか、どこの棚にあるはずだとか言って応じる。棚の分類が、これまた大雑把なのである。大分類のあとは著者名ABC順と決まっている。アジアの棚なら、日本も中国もインドも全てごっちゃ混ぜになって、著者名のABCで並ぶ。ヨーロッパの棚も同じ。歴史ならい

つの時代であろうと、経済なら何を扱っていくように、とにかく大分類のあとは著者名のみが考慮される。思想の棚を、また系統別に分けて他分野と関連させ……といった心にくいまでの棚づくりを、ここで見ることはない。コンピュータのディスプレイに表示された大部分の棚の前に立ち、あとは著者名を目で追えば、誰でも目ざす本が手に入る。

プロのヤマカン注文は返品率十五%

アメリカの出版社は、新刊案内を出す時期を年二、三回と決めている。春と秋、あるいは春・夏・冬に、その三〜六カ月先の新刊をぶ厚いカタログにして一度に出す。一番集中するのが春で、この最大のヤマ場が全米書店協会（ABA）主催のブックフェア（六月）である。各社夏から秋にかけてのラインナップを揃え、書店の反応をみる。書店もまた、その年の動向をここで知る。また夏は書籍の売れない時期なので、夏の出版物については各社とも特別なデイスカウントを用意することが多い。これらの部数とデイスカウント率を交渉するのも、ABAブックフェアでの重要なビジネスである。

あとの季節——秋にもう一回、あるいは夏と冬の二回——は、出版社が書店を巡る。巡りきれない書店には、どさっと重いカタログだけが届く。この時期、仕入担当の三人は毎日カタログに目を通したり、出版社の営業マンと会ったりして忙しい。その場で注文することもあるし、何日も考えてから部数を決めることもある。

最近は大形チェーン店やマス・マーケット本専門の書店を中心に、出版社や取次の「見計らい送品」を受け付ける所が増えているが、BUブックストアはこの「委託制度」を頑なに拒否する。主な取引出版社は五〇〇、取扱い書籍（在庫）七万点。忙しそうなフランクを前に、一部を出版社にまかせてみたらどうかと言ったことがあるが、彼の返答は厳しかった。

「この書店で何が売れるかを知っているのは出版社じゃない。僕だ」。

今でこそPOSがあるから、その分野や作業の過去のデータが詳細に出てくるが、半年前までは、手元にあるデータといったら過去の注文部数のみである。あとは出版社の話をきき、書評などで最近の動向をつかみ、長年の経験（とヤマカン）にモノを言わせて部数を決定する。

これで、一五〜二〇%の返品率を維持する。

取次で一週間、出版社なら三週間

イングラムやベーカー&テラーといった取次会社を使うのは、BUブックストアの場合、急ぎの時に限られる。出版社が発注から受け取りまで二〜三週ンを要するのに対し、取次なら三〜六日で届く。ただし取次が扱っているのは一般書だけだし、支払いも待ってくれないし（出版社の場合は三〇〜九〇日後になる）、かつ返品を受け付けないから、あまり頻繁には使わない。

要するに、殆ど全てが出版社直取引である。

例外はクリスマス時期だ。イングラムなどはこの時期児童書の売れ筋をセットに組む。（返品条件付）。ブックストアとしてもこの時は多目に在庫を抱えておきたいし、実際大量に売るし、ディスカウントも魅力だから、セットで受け付ける。

で、もちろん返品率も上がる。クリスマスが終わってみると九割を返品することになるタイトルもある。「知らない本までセットに入れてくるんだもの」とメアリはブーリー言う。返品する書籍のリストを作り、そのデー

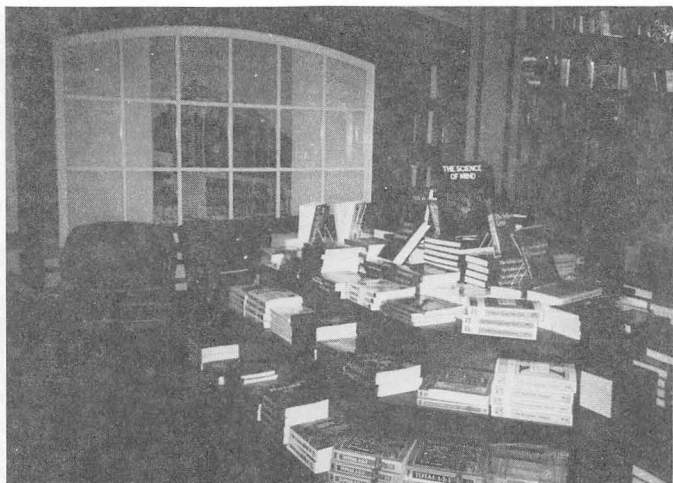
タをまたコンピュータに入力し、荷作りをし、送料書店持ちで返送する。いかに返条付きとはいえ、返品する場合には必ず手紙を書いて添える。返品は手間もコストもかかるから、極力やりたくない、とメアリはいつも言う。

時間的・空間的・精神的ゆとり

実は二年前、私はこの仕入部で半年ほど働かせてもらっていて、以上はその時見聞きしたことを基にしている。しかし、当初私が何よりも興味深く見つめていたのは、上記したような技術面での違いというよりも、どこかにいつも余裕をもっているブックストアの雰囲気の方だった。

児童書売り場には子供たちがころけて遊ぶじゅうたん敷きの空間が用意され、毎週土曜の午後二時にはボールがそこで子供たちに本を読んでもかせる。二階の片隅の喫茶店には、本を（もちろん買う前の）自由に持ち込める。専門書売り場にはゆったりしたソファが並べられ、そこで心ゆくまで昼寝、じゃない、読書ができる。

アメリカの他の会社と同じく、ここでも人々は（上司であろうと）フランク、メアリ、と互いをファースト・



5 階の専門書売場——左手奥に大きなソファが見える

ネームで呼び合い、板や棚で仕切られた各自の空間は、思い思いの個性で飾られる。仕事中にもジョークを交わし合い、歌を口づさみ、ダンスをしたりスポンジのボールでバスケットボールをしたりもする。一方で単純合理的に仕事を割り切りながら、もう一方でオフィスはいつも明るく楽しい。

毎日の統計もとらずにどうやって売れゆきをつかむのかと（当時はPOS導入前だった）しきりに不思議がった私にメアリは、「データにこだわるより、売り場で子供たちと話していた方がずっといいわよ」と言ったことがある。この空気、仕事も大雑把だが、どこか息のつける大らかさが一貫しており、それが私には何ともいえない魅力だった。

そしてそんなブックストアだからこそ、英語もよく話せない留学生の願いを聞き入れて（これは謙遜ではない。二年前の私ときたら、電話の応対もできなかった）、半年も私も働かせてくれたのだと思う。拙い英語で表現されるバカな質問にも、いつも快く答えてくれたし、私自身、数々の違いに驚きながらも、だからといって、何もかも勝手が違うオフィスで孤立感をもつというようなこ

とは一度もなかった。

この私のレポートも、彼らの精神的な（あるいは文化的な）ゆとりのおかげで書けたものだということを、最後に記しておく。

豊田 恭子（とよだ・きょうこ）

出版業界紙「新文化」元記者。一九八七年夏、退職、渡米。現在シモンズ大学図書館情報学修士課程（ポスドク在任）。

弘報委員会より

○一九九〇年代の第一号にふさわしい力作がそろいました。ご執筆の方々に厚く御礼申し上げます。

○東欧——広く見ればソ連を含めたヨーロッパの激動、女性論、そしてメディア論と、今最も注目されているテーマがそろいました。「同時代意識」をもってこれらのテーマを見つめ続けるならば、新しい視座を獲得出来るのではないでしょうか。

○会員各社の一九八九年度の受賞図書一覧を掲載いたしました（次ページ参照）。品揃え等にご活用下されば幸いです。

○次号は、五月刊行の予定です。

一九八九年 人文会各社の受賞図書一覧（アイウエオ順）

- ・朝日社会福祉賞
犀川一夫著『門は開かれて らい医の悲願』（みすず書房）
- ・アジア・太平洋賞
荒野泰典著『近世日本と東アジア』（東京大学出版会）
- ・加納啓良著『インドネシア農村経済論』（勁草書房）
- ・滝沢秀樹著『韓国社会の転換』（御茶の水書房）
- ・大佛次郎賞
原田正純著『水俣が映す世界』（日本評論社）
- ・カナダ首相出版賞
ジョン・H・レデコップ編／吉田健正・竹本徹訳『カナダ政治入門』（御茶の水書房）
- ・新保満『カナダ社会の展開と構造』（未来社）
- ・菊池寛賞
『明治文学全集（全一〇〇巻）』（筑摩書房）
- ・神戸賞
川上正二著『約款規制の法理』（有斐閣）
- ・安田総合研究所編著『製造物責任』（有斐閣）
- ・産経児童出版文化賞
ヤヌシ・コルチャック著／中村妙子訳『子どものための美しい国』（品文社）
- ・サントリー学芸賞
荒俣宏著『世界大博物図鑑第二巻 魚類編』（平凡社）
- ・森洋子著『ブリュッゲルの「子供の遊戯」』（未来社）
- ・養老孟司著『からだの見方』（筑摩書房）
- ・鷺田清一著『分散する理性』（勁草書房）
- ・渡辺裕著『聴衆の誕生』（春秋社）
- ・新潮学芸賞
原ひろ子著『ヘアー・インディアンとその世界』（平凡社）
- ・造本装幀コンクール各賞
荒俣宏著『世界大博物図鑑第二巻 魚類編』（平凡社）
- ・大倉舜二著『七代目菊五郎の芝居』（平凡社）
- ・武者小路公秀・長洲二著『ともに生きる』（日本評論社）
- ・中小企業研究奨励賞
国際女性学会・中小企業的女性を研究する会分科会編『中小企業的女性たち』（未来社）
- ・日刊工業新聞技術・科学図書文化賞
『ビジュアル版・日本の技術一〇〇年（全七巻）』（筑摩書房）
- ・日本ジャーナリスト会議特別賞
吉田ルイ子著『南ア・アパルトヘイト共和国』（大月書店）
- ・日本児童文学学会賞
森洋子著『ブリュッゲルの「子供の遊戯」』（未来社）
- ・日本翻訳文化賞
ビーター・ベルウッド著／植木武・服部研二訳『太平洋——東南アジアとオセアニアの人類史』（法政大学出版局）
- ・日米友好基金賞
有賀夏紀著『アメリカ・フェミニズムの社会史』（勁草書房）
- ・異孝之著『サイバーバンク・アメリカ』（勁草書房）
- ・マルコ・ポーロ賞
石鍋真澄著『聖母の都市シエナ』（吉川弘文館）
- ・山川菊栄記念賞
大林道子著『助産婦の戦後』（勁草書房）
- ・吉野作造賞
猪口邦子著『戦争と平和』（東京大学出版会）
- ・読売文学賞
中井久夫訳『カヴァフィス全詩集』（みすず書房）
- ・倫雅賞
鶴岡真弓著『ケルト／装飾的思考』（筑摩書房）
- ・労働関係図書優秀賞
二村一夫著『足尾暴動の史的分析』（東京大学出版会）
- ・NIRA政策研究・東畑記念賞
岡沢憲英著『スウェーデン現代政治』（東京大学出版会）

人文会会員名簿

(〒113 文京区本郷 5-32-21 みすず書房内)

1990. 2. 現在

	社 名	担当者	〒	所 在 地	電 話	FAX
	青 木 書 店	古川 清	101	千代田区神田神保町 1-60	292-0481	292-0475
	大 月 書 店	原田 敦雄	113	文京区本郷 2-11-9	813-4651	813-4656
	御茶の水書房	平石 修	102	千代田区九段北 1-8-2	230-2510	265-7767
	紀伊國屋書店出版部	佐久間健雄	156	世田谷区桜丘 5-38-1	439-0125	439-3955
	勁 草 書 房	氏家 富男	112	文京区後楽 2-23-15	814-6861	814-6854
	社 会 思 想 社	渡辺 和彦	113	文京区本郷 3-25-13		
				中銀本郷 3 丁目ビル	813-8105	813-9061
幹 事	春 秋 社	澤畑 吉和	101	千代田区外神田 2-18-6	255-9611	253-1384
	晶 文 社	萬洲 隆男	101	千代田区外神田 2-1-12	255-4501	255-4506
	誠 信 書 房	濱地 正憲	112	文京区大塚 3-20-6	946-5666	945-8880
	創 元 社	重光 義彦	162	新宿区山吹町 334-11	269-1051	269-1092
	筑 摩 書 房	菊池 明郎	111	台東区蔵前 2-6-4		
				マスタヤビル	5687-2680	5687-2685
	東京大学出版会	竹内 康一	113	文京区本郷 7-3-1		
				東京大学構内	811-8814	812-6958
	日 本 評 論 社	菅田 誠	170	豊島区南大塚 3-10-10	987-8621	987-8590
	福 村 出 版	土屋知可夫	112	文京区小石川 1-3-17	813-3981	818-2786
幹 事	平 凡 社	須田 康昭	102	千代田区三番町 5 K ビル	265-0455	263-9333
幹 事	法政大学出版局	市川 昭夫	102	千代田区富士見 2-17-1		
				法政大学構内	237-1731	237-8899
代表幹事	み す ず 書 房	相田 良雄	113	文京区本郷 5-32-21	814-0131	818-6435
	未 来 社	西谷 能英	112	文京区小石川 3-7-2	814-5521	814-8600
幹 事	雄 山 閣 出 版	武 一雄	102	千代田区富士見 2-6-9	262-3231	262-6928
幹 事	有 斐 閣	辻村 清隆	101	千代田区神田神保町 2-17	265-6811	262-8035
	吉 川 弘 文 館	阿部 昇	113	文京区本郷 7-2-8	813-9151	812-3544

販売企画委員会 ◎辻村 ○重光 氏家 渡辺 菅田 西谷 阿部

弘 報 委 員 会 ◎澤畑 ○土屋 古川 平石 萬洲 竹内

調査・研修委員会 ◎市川 ○原田 佐久間 濱地 菊池

◎印は委員長 ○印は副委員長

わが父シューマツハー

—その思想と生涯—

B・ウッド／酒井懋訳 3914円
物質至上主義と科学技術の信仰を痛撃する精神の遍歴と赤裸々な人物像

飯・活人 (めし・かつじん) キム・ジハ著

高崎宗司・中野宣子編訳 2884円
社会変革と人間解放の生命思想を展開する韓国民衆詩人の「語り」と随想

分断克服と

韓国女性解放運動

韓国女性運動論Ⅱ 李順愛編訳2884円
70年代女性労働者の実態把握と反省を踏えて新たな解放運動論を展望

御茶の水書房

〒102 東京都千代田区九段北1-8-2
電話03(265)5746/FAX03(265)7767

青木書店

哲学入門

現存の生活の原理を批判し、新しい生活の原理を造りだす事こそ、哲学の中心課題である

生活のなかの
フィロソフィ

中村行秀◎著

¥2060(税込)

近代批判とマルクス

初期マルクスに新たな光をあて、マルクス理論の境位を照射する——気鋭の力作！

渡辺憲正◎著

¥3605(税込)

東京都千代田区神田神保町1-60 ☎03-292-0481

涙と聖者

E. M. シオラン／金井裕訳 祖国を去った1937年に綴られた、〈狼狂〉シオランの思想的出発点の書■1700円(税込)

英語

きのう・今日・あす

D. クリスタル／豊田昌倫訳 英語のあらゆる面を取上げて平易に解説したものでテキストにも最適■2600円(税込)

アインシュタインの夢

宇宙の統一理論を求めて

B. パーカー／藤井昭彦訳 宇宙をひとつの理論で説明する——夢のゴールに迫る現代宇宙論の魅力■2500円(税込)

紀伊國屋書店

本 店：東京都 新宿区 新宿3 ☎(354)0131
出版部：東京都世田谷区桜丘5 ☎(439)0125

大月書店

資本主義はどこまできたか

到達点と近未来を人類史的視野で眺望！

絶賛3刷！

山口正之著

46判カバー・1650円

資本主義時代の三世紀が終わりつつある。資本主義はその生産力を高め、きたるべき新世界への物質的条件を準備するといふ歴史的任務を負って登場したはずである。では、歴史は三世紀をつうじて、どこまで到達したのであろうか

東京都文京区本郷2-11-9/電話03(813)4651〈代表〉

恋愛事件

①500メートルの女たち

■山崎哲十・芹沢俊介 戦後社会における恋愛の水準とその行方。生活圏五百メートルの女達が銀行横領で貢いだ開じられた市民社会からの脱出劇。1400円

密室

女高生監禁殺害・コンクリ詰め事件
幼女連続殺害事件

■森毅十・大塚英志・芹沢俊介 孤立化から密室化にすむ少年たちの危機的現在に、あらゆる既知の論理を超えて挑む、白熱の対話と論考。1200円

▶定価は消費税込み

東京都千代田区外神田2-18-6 春秋社 ☎(03)255-9611 振替東京8-24861

尾崎秀樹

ゾルゲ事件と中国

<事件>から半世紀、現代の視点であらためて考える。2060円+260

D.I. カーツアー／小池和子訳 儀式・政治・権力

儀式が政治の本質的部分である事を古今の事例で検証。3296円+310

S.アンガー／千葉文夫訳

ロラン・バルト

バルトの変貌の軌跡を辿り、書くことの本质に迫る。2781円+260

ミッジリー、ヒューズ／五條・中村訳 女性の選択

混迷する女性解放論の多様な論点を再検討、方向を探る。3090円+310

*定価は消費税込みです。

東京文京 勁草書房 振替東京 後楽2-23 5-175253

エンツェンスベルガーの最新報告!

ヨーロッパ半島

石黒・小寺・野村他訳 EC統合、東欧自由化に揺れる七カ国の生の声を聞く大規模なルポ。名著『政治と犯罪』の著者による東欧問題への最良の手引。【解説対談】鶴見俊輔・長田弘 3850円

甦える フレイブニコフ

竜山郁夫 ロシア・アヴァンギャルドが生んだ知られざる天才詩人の壮大な夢と知的冒険を読みとく。世界で初めての本格的評伝。6800円

晶文社

東京都千代田区外神田2-1-12 電話 (255) 4501

「米価十倍」構想をとおして日本の進路を問う
米価十倍にしなけりや
日本はつぶれる 田中佳宏
自給努力を放棄して、世界の食糧を買いあされば、国際社会は日本をどう見るか。百姓をたたくばすむことではない。この国の水や空気や森や、孫子の代のことなのです。定価一三八〇円
企業論や官僚論に定評のある著者が、並はずれて豊富な読書体験の手の内を公開。痛快な社会批評。……定価一三〇〇円

佐高信の筆刀両断

社会思想社

東京都文京区本郷3-25 ☎03-813-8105

久米邦武
書きおろしシリーズ

昔話の年輪80選

32

稲田浩二 編著

昔話という大樹にきざまれた年輪をたどりつ、原始の世界へ旅する原話集。1540円

メディア政治時代の選挙

33

鮑戸 弘 著 ●大統領はこうしてつくられる

新時代の選挙戦略とは? アメリカ大統領選挙を社会科学の視点で追う。1230円

筑摩書房 〒111 台東区蔵前2-6-4
☎03(5687)2680(価格税込)

私は親のようにならない

アルコールの子供たち

C.ブラック/斎藤 学監訳 アルコール依存症の子供たちの詩などをとに、その環境と心理を考察し、世代を越えた病気の継続を断つ道を探る。2000円(税込)

脳と心のトピックス100

堀 忠雄・斎藤 勇編 脳についての最新の研究をもとに、ストレス、睡眠、食事など、日常生活におけるさまざまな事象を興味深く解説する。1600円(税込)

誠信書房 東京都文京区大塚3-20-6
TEL.03-946-5666

アトラス現代史 全6巻

ブライアン・キャッチポール著

3
ソ連
堀川伸一訳 1860円(税込)
ゴルバチョフ登場までのロシアソ連史の骨格を、地図やイラストを多用して浮き彫りにする。9世紀のウァイキング侵入からイヴァン雷帝、農奴解放、ロシア革命、第二次世界大戦、冷戦時代、宇宙開発など。
1
激動の20世紀
辻野・藤本・高坂訳 1860円(税込)
76項目で語る20世紀の実像。地図図版多数収録。

創元社

大阪市北区西天満1丁目4-2
東京都新宿区山吹町334-11
☎06-363-2531
☎03-269-1051

石井 明

中ソ関係史の研究

A5判/五五六円(税込)
一九四五—一九五〇

第二次大戦後の中ソ関係の過程を、ソ連・中国共産党・国民党の三者の複雑な関係を軸に、ダイナミックに描く。

高橋康夫・吉田伸之編

B5判/三九四円(税込)

日本都市史入門 I 空間

日本における《都市》、そこに生ずる《市民》の歴史を、まじりて中世・近世の都市を対象に探る。全3巻—Ⅱ町、Ⅲ人。

李杜 鉉

四六判/二八四円(税込)

朝鮮芸能史

東洋書 6

シャーマンの祭格から百戯へ、遊芸人たちはやがて仮面劇へなれこんでゆく。西域、日本のアジア芸能エリテをふまえた力作。

東京大学出版会

〒113 東京都文京区本郷7 ☎03-811-8814

N. オーラー

中世の旅

十字軍の遠征からコロンブスの発見の旅まで、中世一千年間のあらゆる階層・職種・目的の旅を描きつくして中世世界の実像に迫る。藤代幸一訳／3914円(税込)

J. ル・ゴッフ

中世の高利貸

12世紀から19世紀の700年、西洋社会の立て役者として生き、富と天国、金と地獄の狭間で演じられた中世高利貸のドラマを描く。渡辺香根夫訳／1751円(税込)

法政大学出版局

102 東京都千代田区富士見2 ☎297-1731

太郎へ、 ピッピより

藤田雅子／著 1500円(税込)
ぬくもりとゆとりの国から、経済至上主義の国へのメッセージ

教師たちの詩

—この子らをみつめて

深澤義男／編著 1400円(税込)
「教育とは何か、どうすることか」を各教師が自分のことばで語る

I Love 深窓の夫

—私の両性自立論(12日発売)

木下明美／著 1350円(税込)
男と女の地殻変動を解き明かし新しいパートナーシップを提示

日本評論社

豊島区南大塚3-10-10 ☎987-8611

ヌガラ

19世紀バリの劇場国家

日本ジャーナリズム史研究

西田長寿 「明治初期新聞発達史概説」など著者畢生の19篇。明治期の世論と議論と情報を分析する最良のガイド。全巻円

いてふに寄す

安藤雄雄感話集 2

『母郷行』『美田』

著者の多作母體の時代の二句集の影印復刻。母の事話を詠む『母郷行』、子孫に遺す心の『美田』。見市冬解説 四三三円

東京文京本郷
3丁目17-15

みすず書房

モダン都市文学

全10巻

編 海野弘／川本三郎／鈴木貞美 ●監修 山本浩二 MOORE'S

既刊 3冊

Ⅰ モダン
東京案内

Ⅱ モダンガール
の誘惑

Ⅲ 都市の周縁

Ⅳ 都会の幻想

Ⅴ 観光と乗物

Ⅵ 機械のメトロポリス

Ⅶ 犯罪都市

Ⅷ プロレタリア群像

Ⅸ 異国都市物語

Ⅹ 都市の詩集

平凡社

〒102 東京都千代田区三番町5
須田・東京0-29639/ ☎03-265-0455

1990年2月20日発行 年4回発行 第57号

発行所 人文会 みすず書房内

〒113 東京都文京区本郷5-32-21

回覧者印	回覧者印	回覧者印	回覧者印